
A・K・I・R・A～俺から私へ

港野ヨーコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・K・I・R・A 俺から私へ

【Nコード】

N0895I

【作者名】

港野ヨーコ

【あらすじ】

コンビニ帰りの俺は夜の公園で奇妙な兄妹と出会う。二人は俺に死んでくれと言うのだが：

プロローグ（前書き）

はじめまして、この作品はペルソナ（3，4は含まない）と女神転生をベースにした二次小説です。魔法、能力にオリジナル設定があります。この作品に出てくる人名、地名、団体名等は、あくまでフィクションであり、事実とは関係ありません。

プロローグ

九月も夜になると日中の残暑が嘘みたいに涼しくなる。

俺はコンビニで雑誌と飲み物を買々と店員の声に送られて店を出た。家から近いので短パンにTシャツ姿である。後は戻るだけだが、買ったゲーム誌を早く読みたいので近道をして公園に入った。

園内は広い。昼は子供連れの母親や保育園児達で賑やかなのだが、夜は裏腹に街灯の照明だけで非常に寂しい。普段ならイチヤつくバカップルや酔っ払いのおっちゃんがいるのだが、今日に限り誰も見かけず、近くの高架線を走る電車からの騒音も聞こえない。

— もし帰りは公園を横切らないで遠くても道なりに戻っていれば…

— もしも『あの二人』に遭わなければ…

平穩無事な生活が引き続き送れたかもしれない。俺は早足で反対側の出口に近くまで来た時。

「こんばんはお兄ちゃん！」

「…こん…は…お兄ちゃん…獲…」

驚いて思わず振り向くと二人の子供がいた。独りは男の子で、もう一人は女の子。髪は漆黒のよく似た顔立ちなので兄妹らしい。二人とも黒色の服を着て帽子をかぶり、目を逸らさず俺を見つめている。

(おいおい…迷子か?)

一瞬思ったが二人からはそんな雰囲気が無かった。

携帯の時計を見ると21時を過ぎている。こんな時間に親と一緒に居ないのは変なのと、関わりあいたくないので無視する事にした。

「…怖いのか? ビビリ…意気地無し…」

「高校生なのに、ヘタレなお兄ちゃんだねー」

兄妹は勝手な事を言うので、ムツとしたが大人気ないので振り返ると腰を屈めた。

「俺に何か用? 迷子にでもなったのかな?」

男の子は首を横に振った。

「違うよ。非常に大事な用なんだよ」

「…非常…大な…用事…」

男の子は嬉しそうに、女の子は所々言葉が途切れるが…静かな口調だ。

「で、大事な用とは?」

俺が訊くと兄弟はお互いの顔を見合わせていたが、とんでもない事を言い出した。

「お兄ちゃん死んでちょーだい！」

「…死…亡遊戯…」

「は？」

一瞬、ポカンとして二人を見た。ふざけているのかと思ったがそうには見えない。兄妹の手には鉋がいつの間にか握られている。

「おいっ！子供でも冗談はいい加減にしろよ！」

関わりあっているとアホらしいので駆け足で出口に逃げようとしたが、急に動けなくなった。まるで金縛りにあったみたいで動けない。兄妹はクスクスと笑いながら俺の体を触りまくる。

「無駄だよお兄ちゃん、妹の『バインドボイス』から逃げられないよ」

「…無駄…捕…完了…」

勝手な事をいつてくれるが俺は全く動けない。

「何でだよ！！」

「だってお兄ちゃんが弱すぎるからだよ。どーせ、このまま生きていてもあいつらに殺されちゃうから」

「ふっ！ふざけるなよ！」

普段、温厚でお人好しと言われる俺でも腹が立ってきた。睨みつ

けるが妹の方は薄ら笑いを浮かべている。

「…貧弱…弱すぎる…お姉…ちゃんになっ…すれば…」

二人は俺を見ている。まるで市場に売られる子豚を見る表情だ。

「ねえ…お・に・い・ち・ゃ・ん…痛いのと痛くないの…どっちがいい？」

「いっ！痛くないほうだ！！」

「はやっ！お兄ちゃん。もしかして…早漏なの」

俺は即座に答えた。躊躇っていると何か凄惨な事が待ち受けているみたいだからだ。二人は顔を見合わせてあきれた顔をする。

「情けないなあ…お兄ちゃんの泣き叫ぶ姿を見たかったのにい。

最初は苦痛でも、それが快感に変わるのが分からないかなあ？」

男の子は口をとがらせる。

「…手足切断…解体…内臓…脳…目玉…摘出」

妹の方は恐ろしいキーワードを言う。マトモじゃない！冗談かと思っていたがこんな子供が口にすると背筋が寒くなってきた。

（駄目だこいつら…何とかしないと…）

心の中で突っ込みを入れた。二人は俺から離れてヒソヒソ話をしている。時々、経験…とか…ベルアップなどが聞こえる。結論が出

たのか二人は俺に近づいた。

「妹と話したんだけど、お兄ちゃんには強くなってもらう予定してたんだよ。でも今の状況だと『育成』するのに時間が足りないんだ。それで…」

「…転移…熟成…美味…我慢」

「お兄ちゃんには…『永眠の誘い』で逝ってもらおうねっ！」

「ド…ルミナ…」

途端に俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

主人公の名前は次からです。今後ともよろしくお願いします。

プロローグその2

無限に広がる小宇宙：幾多の星が生まれ、そして消えていく：俺の意識は無数の光り輝く渦の中にいた。

―死んじやったのか：それとも：痛みも苦しみ感じられない。肉体の感覚もまったく無い。例えるなら夢を見ているのと同じ感じだ。周囲を見回すと光り輝く蝶が無数に舞っていて、自分も蝶なのか蝶が自分なのか、なんだかよく分からない。光輝く渦の周囲は島宇宙が無限に広がっていた。

…大きな星が、ついたり消えたりしている：ハハっ、大きくいな…！

彗星かな？ いや、違う：違うな。彗星は、もっとオ、バアッ！つて動くもんな…

精神崩壊した人の台詞を呟いていると。噴水広場みたいな場所に立っていた。見ると裸でなく、ちゃんと服を着ていた。光り輝く蝶が俺に纏わりついていたが離れると、突然光った。

「うおっ！まぶし！！」

光が収まると一人の【男？】が立っていた。蝶をモチーフにした白銀の仮面を被り、白いロングコートを着て腕を前に組んでいる。なんだかとても危ない人みたいだ。

『普遍的無意識の世界にようこそ。私の名は《フィレモン》決して怪しい者ではない…』

年配者でもなく若くもない：威圧的でもなく穏やかな声が直接、頭の中に聞こえる。

（怪しさ大爆発です…）

心の中で突っ込むが、この人をどこかで見たことが有る様な無い様な感じがする。

『君は久しぶりかもしれないが：私を忘れたかな？』

「すみません、ちょっと若年性健忘症になったみたいです…」

フィレモンは肩をすくめた。俺の返答に呆れているのかもしれない。

『あの頃の君は幼かったから無理はないかもしれない：ここ、普遍的無意識の世界：領域は人類共通の魂の故郷だ。人々の自我をここで生まれ、そして再び還る：詳しい事はググってもらいたい』

（もしかして：この人も式チャンネルやっているのかな…）

阿保な事を考えたが、大事な事を思い出した。

「フィ：レモン：俺は死んだの？」

『死んだよ』

あっさり言ってくれるよ！この人：とにかく俺は詳しい説明を求めた。

『彼奴の狙いは、君が覚醒すると大いなる計画の邪魔になるので、その前に芽を摘んだのだ。それで私は君をここに招いた』

「大いなる計画：彼奴ってあの双子の兄妹の事か？」

俺はあの病んだ兄妹を思い浮かべた。もう二度と会いたくないよ…

フィレモンは首を横に振る。仮面をつけているので表情が分からない。俺は呆然とするがこれからの事を彼に相談しようとした。

『君には二つの選択肢がある。ひとつはここに留まる事。もうひとつは別の身体に精神転移する事だ』

「…元の身体に戻るのが無理でも…例えば、えーと【他の世界】の俺の身体とかに転移できないかな…」

パラレルワールド、平行世界の単語を思い出して俺が呻くように言うと彼は首を横に振る。

『可能だか彼奴もそれを見越して世界に網を張っている。どの世界に転移しても必ず君を抹殺するだろう』

どう考えても選択の余地が無さそうだ。

『別の身体に転移して彼奴に発見される確率は少なくともないが、最悪、気づかれる迄に時間を稼ぐ事が出来る。そして君には《ペルソナ》の力を新たに与えよう』

《ペルソナ》その言葉はなんとなく思い出してきた。

『女神のように慈愛に満ちた自分：悪魔のように残酷で無慈悲な自分：人は様々な仮面を着けて生きている。現在の君も無数の仮面のひとつに過ぎない。ペルソナも数ある君の姿のひとつなのだ…』

『これから君はペルソナと共に己の存在と未来を賭けて戦わねばならない。東京は欲望と災いの魔都化しは始めている。そこで』

フィレモンは言葉を切り、俺を見た。

『ペルソナを与えるには、私の前で己の名前を名乗れる事だ。普遍的無意識の世界でこれが出来る人間は非常に少ない：君はもう一度名乗れるか？』

フィレモンはこちらを見ている。俺の頭の中で様々な事が渦巻いてしばらく無言だったが。

「俺は明良だ！沢村明良。逃げも隠れもしない！東第一高校三年。趣味はゲーム、ネットサーフィンその他色々だ！」

なんか余計な事まで言ったが。彼は頷いた。

『よろしい。餞別として【カード】を特別に三枚与えよう』

途端に俺の周りが暗くなり奈落の底に落ちるような感覚を身に受ける。彼になんか重要な事を訊き忘れたみたいだ：とても重要な：

第1話

「知らない天井だ…」

顔に掛けられていた布を取ると呟いた。いつの間にか俺は眠っていたようだ。

「あれっ？」

首を動かして部屋を見渡してみた。俺が寝ていたのは清潔そうな白い壁と床の部屋で、病院の一室のようだ。何でこんなところにと考えてからあの事を思い出して、勢いよく跳ね起きた。

そうだ、夢の中で『フィレモン』に名乗ってから目の前が暗くなつて…で、気がついたらここにいた。

身体に痛みや痺れは無い。

「きつと夢だったんだ。夢オチってやつだ」

あの双子の兄妹に襲われて気絶してた所を親切な人が病院迄運んでくれたのに違いない。

そう言つて俺は見知らぬ親切な人に感謝し、何気に頭をかいいた：が、あれ？

今触ってる髪：すごく柔らかくてさらさらして長い。俺の髪は短くバサバサしてこんないいものではなかったはずだ。

まさかと思い、恐る恐る視線を下に移す。

そこには白衣を持ち上げる二つの膨らみがあった。

パジャマから伸びる手も、細いしなやかな指に、白い滑らかな肌。どう見たって女の子の指。

「…」

無言で胸元に手を伸ばし、裾に手を掛ける。開いてから、すぐに閉じた。

……うん。

「なんじやああああああああああああああああ！！こりやああああ！！？」

ジーンパンを穿いた某刑事になった気がする。って、おい！声も若い女の人だよ！お富さん！！

えっ！なんで！？　思わず股間を触ったら、うわ！男のシンボルが無いよ！！

「な、なっなんで女になってんだよ！？」

鏡を見ようと慌てて立ち上がろうとしたが、思わずコケてしまいベッドから落ちた。

「痛っ！！」

床に肩をぶつけてが痛いよ…鏡を探そうとしたが見当たらない。

「うう、誰か来て、状況を説明してもらいたいよよ？」

と、気前のいい神さまに願いが届いたのか目の前のドアが開き、誰かが部屋に入ってきた。

入ってきた人は女の人。服装からして看護士みたいだ。彼女は俺に目を向けず、壁に掛けてあるホワイトボードに何か記入している。

「あっあの、すみません鏡があれば貸してもらいたいのですが…」

俺の言葉に振り向いたが、看護師の目は大きく見開き、驚愕の表情で後ずさりする。

「きゃああああああああああああああああ！！！」

絶叫して逃げた。

「ちよっ！俺の顔を見て逃げるなんて失礼な人だよ」
後を追って病室を出た時、サイレンが鳴り響いた。

「え、っ？火事かバイオハザードでも発生したのか」

裸足だが構わず廊下を約10メートル歩くと十字路が見えたので右に曲がると人影が見えた。

「えっ！　うっ嘘でしょ…」

俺の眼前には医師や看護師でなく完全武装した兵隊？が待ち構えていた。人数は約10人位だ。間違っても警察や警備員では無い。自動小銃を手にして銃口はこちらに向けている。

「うっ撃たないでっ！！」

思わず両手を上げると兵隊の一人が手錠らしい物を手にして俺に近づいた。兵隊はまるでバケモノを見るような表情をしていた。

「うっ動くなよ、口を開けろ！！」

後ろ手に手錠を掛けられボールギャグを嵌められると目隠しされた。拘束されると何だか惨めになる。

「ゆっくり歩け！！妙な真似をすれば警告無しで撃つ」

「…」

こんな状態では返事も出来ないよ。オッサン…

どのくらい歩かされたか分からないが椅子に座らされると目隠しは外されたけど手錠とボールギャグはそのままだ。

目の前に女の人がいた。しかも、すごい美人。

柔らかそうな長い金髪だけど顔は日本人なので染めているのだろう。整った眉毛は黒い。灰色の綺麗な瞳に端正な顔立ちで紫色のルージュをひいている。抜群のプロポーションを誇る体は胸元が大きく開いた漆黒のボディコンシヤスな服に包まれていて、その貫けるように白い肌と相まって彼女の存在感を引き立てる。椅子に座り、形のいい足を組んでいる。

（ちよつとヤンキーっぽいけど…）

嬉しさと、驚きと安堵が入り混じった雰囲気で、なんというか、急に俺を抱きしめた。まるで生き別れた恋人に再会したよう抱きしめ方だ。甘い香水が鼻を刺激する。

「えっ！あっ！その」

戸惑いながら周囲を見ると殺風景な部屋で机以外には無かった。

「信じられない…でも…こんな事が…本当に…あるなんて」

声もすすり泣くように透明で綺麗だった。もうずっと聞いてたいと思うほどの。

じつと彼女に見惚れていたら俺を見ると笑みを深くした。

「ふふ、あたしの顔に何かついていいるのかな？」

「あ、いえ」

自分の顔が赤くなるのがわかった。

俺ははしどろもどろながら言葉を搜す。だけど、何を言ったらいいかわからない。色々なショックで思考が纏まらないのだ。

「手錠とボールギャグを外しなさい」

彼女は俺の背後に立っている二人の兵士に命じたが彼らは顔を見合わせた。

「危険です!!」

「襲い掛かるかもしれません!!」

「私が責任を持ちます」

「しかし…」

兵士が躊躇うと彼女の雰囲気が変わった。

「そんなに…このア・タ・シを怒らせたのか!!」

ドスの効いた口調になると兵士は怯えた顔して拘束を外すと出て行った。部屋には彼女と俺の二人だけになった。

「さて、答えてもらいましょうか…」

いつの間にか拳銃を握り銃口は俺に向け、冷徹な眼差しで俺を凝視している。

「て、言われても…」

不安そうに拳銃を見た。銃はグロックと判別したがシリーズは分からない。

「じゃあ、あたしが質問をしましょう。あなたは何者なの? 『なぜ死んだ妹に乗り移った』のかしら?」

俺は驚いたが死んだ妹が徘徊していれば怪しむのが当たり前だ。下手な嘘は看破されそうなのでフィレモンの事は黙って、あの事から話をする事にした。

「えっと…俺は沢村明良。住所は…」

名前、住所、生年月日、年齢から話し始めると彼女は机の上に置

いてある端末機に入力する。どこかに身元を照会しているのかも知れない。

入力が終わると上着のポケットからタバコを一本取り出すと口に咥え、ジッポのライターで火を着け吸い込むと俺に向けて紫煙を吐く。俺は煙草の匂いが嫌いなので顔をしかめる。

端末のモニターを見ている彼女は溜息をついた。

「確認が取れたわ。沢村明良はすでに死亡している。死因はショック死で葬儀は終わっているわ…それに妹は君と接点が無いから話は事実ね」

もしかしたらと淡い期待をしていたが、現実は厳しいよ。

「君の『魂』は原因は不明だけどか死んだ妹の身体に移した。普通は有り得ない、が…前例が無い訳でも無い…」

タバコを灰皿に消して腕を組み天井を見上げた。何か思案しているのだろう。

「そんな、不安そうな表情をしないでほしいな。あたしの名前は結城沙羅。よろしくね沢村明良君」

「あつ、こ、こちらこそよろしくお願いします」

とつさに頭を下げた。

「まあ、いきなり目覚めたら女になってたんだから驚いてるだろうけど、君のその身体はあたしの妹で、これは偶然かも知れないが名前は『晶』なのよ」

「へえっ女の人で珍しいですね」

俺は相槌を打つ。

「まっ、男でも、広美や勝美とかがいるからそうでもないさ」

俺を見てニヤリと笑う。にしても、彼女を見ているとなんだか安心できる。以外に姉御肌な性格かも知れない。

「それとあいつらが君を拘束した理由は分かるかな？」

「死んだ人間が動き出せば絶対にゾンビや感染者だと思いますからね」

「その通り。暴れて噛み付かないように対処したのさ。まあ、こ

の『商売』を長くやっていると珍しくも無いからね」

俺は頷く。ホラー・ゲームや映画でも、そんなシチュエーションがあるからだ。こんな風に現状——自分が女になってしまっていることも些細な事に感じるほど。

「あの、俺の姿って…」

「はい」

すぐに結城さんは鏡を貸してくれた。

「ありがとうございます」とお礼を言ってから鏡を覗き込む。

そこには美少女がいた。結城さんを見てしまったから自信はないが。正確には少女から大人に成長する間かな？端正な顔立ちで『クール・ビューティ』に相応しく、それと結城さんを若くしたような感じで、もし同じ年だったら双子かも。

シャギーの入った腰に届きそうなサラサラの黒髪と綺麗な灰色の瞳。すっきりした鼻筋に、貫けるような白い肌。それらが見事なバランスで配置されている。強い意志を持つ女の顔だ。

うう、完全に女だ。胸がある時点で諦めてはいたけど、現実として突きつけられるのはなんだか嬉しいのやら悲しいのやら……

もう、これから何がどうなるのか不安になるよ。

「さて、隊長に報告するから沢村君も一緒に来なさい」

第2話

「あの…結城さん」

「んー、あたしの事は沙羅と呼んでおくれよ。君の口から『結城さん』と呼ばれると何かこそばゆいような…姉貴、沙羅姉えでもおKよ」

「前向きに努力します…」

俺と沙羅さんは廊下を歩きながら話す。初対面で馴れ馴れしく言えないよと思いつつとりあえず話題を変える。

「沙羅さんの銃はグロックですよね」

「ふーん、よく知ってるわね。さすが男の子かな」

沙羅さんはホルスターから拳銃を抜くと俺に見せてくれた。

「これはグロック21。シリーズの45口径バージョンよ。9ミリ弾に比べて装弾数は少ないけど威力は約2倍ってところね」

「なるほど45ACP弾を使うのか…」

銃には興味あったので色々話しているとドアの前に立った。沙羅さんはなるべく丁寧になっこした。

「入りましたえ」

中から男の声がする。

「失礼します」

沙羅さんに続いて俺も部屋に入る。

室内は広く、床は絨毯を敷き詰めていた。壁に掛け軸や絵画が飾られていて値段の創造がつかない。部屋の中央には革張りのソファに挟まれたテーブルがある。さらにその奥にはマホガニー製のデスクがあり一人の男が事務処理をしていた。その背後には魔法陣をデザインした大きな絵画がある。

「沙羅。報告を聞かせてくれ」

男はデスクからソファに移ると俺達に反対側を示した。

沙羅さんと俺が座るといつの間にか秘書らしきスーツ姿の女性がコーヒークップを載せた盆を持って来て、テーブルに並べた。

「失礼します」

秘書は盆を持つと一礼して部屋から退出した。男は40代位で柔和な顔だが眼光が異常に鋭い。前髪の一部が白髪なのが印象に残る。男がコーヒーに口をつけると俺と沙羅さんも口をつける。

「さっそく聞かせてもらおうか」

「はい」

沙羅さんが話し始めると男は腕を組み俺を凝視するので落ち着かない。立て続けに飲むとコーヒーはすぐ空になった。

「：以上です」

男は無言だったがコーヒーを一口飲む。

「事情は判った。この『商売』をしていればそれぐらい不思議でも無いからな。沢村明良君：だったね。君の境遇には同情を禁じえない：私の名前は雷真通称『ライシン』と呼ばれている。『対悪魔特務機関ク・リトル・リトル』の隊長を任されている」

初めて聞く名前だ。と、言うより日本にそんな組織が有るのが意外だよ全く。

「あの、対悪魔って：あの『悪魔』のことですか」

「その通りだ。沢村君は悪魔から何をイメージするかな？」

雷隊長は俺に視線をむけた。

「そうっスね：こう、何て言うか色は黒く、恐ろしい顔して尻尾と、背中に蝙蝠みたいな翼が生えてて、あれに出てくるメフィストフェレスみたいに人間を誘惑、騙し、契約して魂を奪う存在ですね」
昔のアニメや漫画に出て来るような：秋葉原駅周辺に出没し、しつこく付き纏い勧誘する輩は悪魔だよ全く。他は脳内で悪の象徴として現われ、善の象徴たる天使と死闘を繰り広げたりするアレだ。

「ステレオタイプな悪魔像だな。蝙蝠の翼ってのは、サキュバスから来たイメージが多い：メフィストフェレスはあまりにも有名だ」
そこで言葉を切ると口調が変わった。

「実は、キリスト教の悪魔は、元は古き神々だったのが多い」

「どういう意味ですか？ 高校の世界史で習った覚えがあります
が——キリスト教ってのは一神教だから、神は一人しかないはず
でしょ？」 『元は神』、なんていうのはおかしくないですか？」

「そう。神は一柱のみが、一神教の絶対のルールだ。だから、他
の神々を認めていないのだ」

認めてはならない神：何かのキーワードみたいだよ：

「世界各地には仏教があり、神道があり、ヒンドゥー教があり、
イスラム、ゾロアスター教しかり、ブドゥ教：新興宗教を含める
と数限りなくある。そして、神々もまた存在する」

「日本だけでも八百万いるって話ですね」
沙羅さんは俺たちの話を黙って聞いていた。

「沢村君に言った通り、一神教に取って神とは一柱しか存在しな
い。故に、異教の神は間違った教えで民衆を堕落させる邪神：悪魔、
という事になる」

「だから、元は神様って訳か：一神教に取り囲まれる過程で、悪
魔扱いされるようになった：」

「異なる宗教を持つ民族同士が対立すれば戦争は必然的に起こる
事だ。さすがに現代はそれだけでは在り得ないが」

うはっ、話が壮大になってきたよ。古代、中世とは違って、現在
は土地、利権を巡って争うのが多い。

「異教に対して無知でいればそういう事も起こるが、現代の情報
化社会では無理な話だ。ところで：沢村君は聖書を読んだ事あるか
ね？」

「んー？ いや、無いですね」

今まで、そんな事は思いもよらなかった。雷隊長は苦笑する。

「まあ、日本人の大半がそうだからな。悪魔に対する者として扱
われる、『天使』って存在だが——でも聖書の世界では、悪魔より

も天使の方がよっぽど人を殺している」

「えっマジっスか!？」

天使と言えば人を助ける存在なんだと、思っていたのだが。

「さらに、件の神自身くだんによる大量虐殺も。有名なところでは、例の大洪水とかな」

神々による大洪水：

箱舟に乗った生き物以外を殺し尽くした、神の裁き——俺も、それくらいは知っている。

「言われてみれば、そうかも知れないけどさ……」

「勿論それは『神』による正当な裁きなのだが、見方を変えればその『殺戮』を『悪』と呼ぶ事も出来るだろう」

「：神なのに、『悪』ですか？」

「そうだろう。全知全能ってのは『全て』なんだから、善も悪も併せ持たなければ正しくない」

全知全能の神は、善悪併せ持つ。彼に似せて創られた、人類と同じように。

雷隊長は神や天使に対して何か隔意があるみたいだ。

「話を纏めると、悪魔って言葉は解釈によってかなり広い意味で使われる事もある訳だ。要するに、【人ならざる者】の総称だ」

「人ならざる者の総称ですか」

「それこそ神話の神々から、都市伝説の噂に出てきた現代妖怪まで幅広く網羅している」

——都市伝説の現代妖怪。

「話が長くなってしまったな。我々の組織は悪魔【人ならざる者】

と闘う、と思ってくれればいい」

「それと沢村君の処遇だが、明日、精密検査とカウンセリングを受けてもらう。そして君の決断を聞かせてほしい」

「えっ？」

なんか雲行きが怪しくなってきた。

「我々と共に『悪魔』と戦って欲しいのだ」

フラグが、キタ————。

「もし断れば……」

当然、お約束のお言葉を有り難く頂く。

「君の身柄を『無期限』に拘束するだけだ。どちらにしろ今の身体では家に帰れないぞ」

そうなんだよ。俺は既に死亡して葬儀も終わっている。そこへ見知らぬ女の子が来て俺は息子だなんて言ったら、親父とお袋は俺をき○○○扱いして黄色い救急車を呼ぶに違いない。

「ところで、腹はすいてないか？それならば食堂は閉まっているが君には特別に手配しよう」

壁の時計を見ると22時を過ぎていた。

「特にすいてないです」

「分かった。沙羅、彼を病室に連れて行ってくれ」

「承知しました、沢村君行きますよう」

沙羅さんが立ち上がると敬礼をしてドアに向かうと俺も続いた。

「本来なら、あたしの部屋へ一緒に戻るんだけど、今回は事情が事情だけに医療部の病室で、今夜はそれで勘弁してね」

「別にいいっすよ。で、沙羅さんは一人暮らしをしてるんですか？」

「妹と官舎に同居してたのよ」

一瞬、沙羅さんの表情が辛そうに見えたのは気のせいかな。

病室は個人部屋らしく清潔なベッドとその横にサイドテーブルと

見舞い人の椅子が有るだけだ。

「お風呂は検査の後になるから今日は我慢してね」

沙羅さんは申し訳無さそうに言う。俺は椅子に座る。

「明日、あたしが朝8時に来るから、それまでグッナイト」

彼女が病室から離れたのを確認するとドアを開けようとしたが。

「チッ！ロックしてやがる。と、なると何処かに監視カメラや盗聴器があるに違いない」

ベッドに入ると、精神的に疲れていたのか色々考える前に眠ってしまった。

第3話

「おはよう、グッスリ眠れたかしら？」

「おはようございます。ドアをロックしなくても眠れましたよ」

「はははっ！ いーじゃないの。万が一の為よ。男だったら細かい事にすんじやないっての」

沙羅さんは豪快に笑う。身体は女なのですが……

病室を出て検査室へ向かった。着ている入院着はそのままの良いらしい。

「これから検査を受けてもらうんだけど食事は終わってからになるわよ」

「えっ！」

「胃を検査するのに食べちゃまずいでしょ。まっそんな特殊な検査じゃないから大丈夫。まさか身体を切り刻まれると思ったのかしら」

「そっそんな事無いですよ」

「検査するのは上層部へ報告の資料の為だからね。その身体に変異があったら当の昔に処理していわ。このあたしの手でね」

沙羅さん、顔が怖いです。

検査内容は一般病院の人間ドックと変わらないらしい。医師は俺に何か特別に言うのでなく淡々と進めている。身体の設定から始まり、各種レントゲン撮影があったが第一の試練が訪れた。

「うーんどうしよう……」

尿検査と細菌検査は非常に恥ずかしい。

女子トイレで悩む。立ってするのか便座に腰掛けてするのかそれが問題だ。看護師に聞くのは恥ずかしいよ。覚悟を決めると腰掛け

て前をはだけると「えいつ」とショーツを下した。

問題無く検査は終わって、壁の時計を見ると11時半を過ぎていた。

「お疲れ様!!」

待ってくれていた沙羅さんと一緒に食堂に向かう。昼前だったので思ったほど混んではない。昨日の件があったのが嘘みたいで俺達を見る者はいなかった。

券売機で食券を買う。もちろん沙羅さんが払ってくれるので有り難い。彼女はIDカードを読み取り口に差す。後日精算されというので便利だ。

「好きなものを選んで良いわよ」

俺はAランチを選ぶと沙羅さんコーヒーセットにした。

「いただきます」

昨日から食事していなかったので。とてもうまい。沙羅さんは口にせず俺を見つめている。

「ふふ、美味しそうに食べるのね」

そりゃ空腹は最高の調味料だからですよ。食べ終わってお茶を飲む。

「沢村君、オ・ン・ナになった感想は」

エッ!! イキナリナンテコトイウノデスカ?

沙羅さんは悪戯っぽい目で囁く。

「妹の○○○○を見て興奮してオナニーでもしたのかなってよ」
飲んでたお茶を盛大に吹いた。

「そっ! それは、その」

「姉として、ひっじょーに気になるのよ」

勘弁して下さい。あなたは、いじめっ子ですか。

「ナルシストじゃあるまいし、何が悲しくて自分の裸で興奮しな

きやならないんツスカ？あつそれと野郎の裸も興味無いですからね」

「つまんないわね」

全く何を言うのやら、何か疲れるので話題を変える。

「で、午後はカウンセリングですね」

「13時からよ2階のカウンセリングルームで行なうから早めに行くわよ」

後で追及されそうだ。

カウンセリングルームはム以外にも広くて観葉植物が適度に置かれて、目にもやさしくリラックス出来そうだ。前面ガラス張りの窓から太陽光が入って暖かい。部屋の中央に机と椅子がその脇に革張りのソファがある。ここは対悪魔特務機関ク・リトル・リトルの殺伐した雰囲気が無い。

そのソファに一人の女性が座っていたが俺達に気づくと立ち上がった。

その時、異変を感じた。胸の鼓動が激しくなる。

空間から切り離されたみたいだ。

——こっ！これは？

——恐れないでください。敵ではありません…あなたの『ペルソナ』が私の『ペルソナ』と共鳴しているのです…

それはわずか一瞬の事で元のカウンセリングルームだ。どうなっているのやら分からないよ。

その女性は俺の前に来た。ショートヘアの小柄な女性で、優しうでいて強い意志の表情だ。淡いベージュ色のスーツ姿だが堅苦しい雰囲気は微塵も感じない。

「はじめまして、私は園村麻希と申します。結城、いえ沢村明良さんですね。宜しく願います」

園村さんは丁寧なお辞儀をしたので俺もぎこちなくした。

「麻希、久しぶりね。可愛いわよ」

「沙羅さんもお元気そうですねによります。美しくて羨ましいです」
微笑む。この人がカウンセラーなのかと思ったら何かホツとするよ。

「随分早かったわね」

「午前の予定が早く終了したので待たせてもらいました」

俺達はソファに座ると、園村さんは名刺入れから一枚取ると渡してくれた。

終サイコセラピー 臨床心理士『園村麻希』

話を聞くと終サイコセラピーは静岡県すまろの珠？瑠市すまろにあり、エルミン学園卒業後、一年間留年して国立大学に進学して心理学部に入學して臨床心理士の資格取得を目指したそうだ。資格取得するには臨床心理学系の指定大学院修士を修了していることが条件らしい。

「へえー努力家なんですな」

「そんな事無いですよ。仲間達の支えがあればこそです」

「謙遜しなくてもいいわよ、麻希が頑張り屋だからこそ仲間達も応援したんだと思う。ライシン隊長も高く評価してるし、うちに専属でいて欲しいのよ」

「有り難うございます。早速始めますので宜しくお願いします」

「あっはい、こちらこそです」

彼女はカバンから書類を出した。

「それと沙羅さんは席を外して貰います」

沙羅さんは不満気だったが素直に部屋から出て行った。

「沢村さんの抱えている悩みは意識が無い時ゾンビの如く暴れる恐れと女性の身体に転移した事で男と女の違いで悩む事ですね」

「はい、そうです。あとペルソナについてなのですが…」

カウンセリングなんて初めてだからちょっと緊張するよ。まっ俺の場合は特別なケースかも知れない。

「そんなに堅くならないで…今日は話だけですから。自我を忘れ

てゾンビみたいに暴れる心配は無いです。」

それは俺も気にしていないのでカウンセラーから言われて納得する。それはペルソナ能力なのかもしれない。俺は自分の身に起きたことを話した。

「で、普通こんな状況に陥ればパニックになるものだと思うんですが、何ていうか、その、他人事の様な感じですね。問題なのは：女性の前で言いにくいけど立ちションが出来ないのが何か不便なんです」

さすがプロなのか俺の話に動じない。

「それは慣れてもらうしか無いです。今後の女性としての身だしなみは沙羅さんに相談するのがベストですし勿論、私も協力します」最低限の言葉遣いと身だしなみは必要なのか：完全に納得は出来ないけど変な女に見られるのは何か嫌なので慣れるしかないか：。

「やっぱ人に話すと幾分か気持ち的に楽になります」

麻希さんは微笑する。

「時間がありますので急に結論は出なくても問題無いですよ。今日は直接、沢村さんから話を直に聞きたかったから：フィレモンに会ってペルソナの力を手に入れたけど使い方が解らない、との事ですね」

俺は頷く。

PERSONA

《ペルソナ》

ラテン語で『人』、『仮面』を意味し、心の奥底にある『もう一人の私』、別人格が具現化した特殊能力のことを指す。悪魔ように残酷な自分。女神のように慈愛に満ちた自分。そして、誰かに対して優しい自分。

人は自分の内に無数の『自分』を持っている。

その《仮面もうひとりの己自身》を神話に出て来る神や悪魔の姿を与えて使役する。

麻希さんの解説は続く。

フィレモンは時に人々に夢を介して啓示を与え良き方向へ導く。
『ペルソナ様』^{イニエーション}と言う特定の儀式を行うと、眠りの中で『フィレモン』が現れる。そこで最初の試練、自分が何者であるかを認識する（名前を言う）ことが出来れば、その者はペルソナ能力を与えられる。

ペルソナは精神力を現す単位、スピリットポイント“SP”を消費して発動し、火炎や電撃を操る攻撃魔法、傷ついた仲間の回復、ペルソナの持つ剣や槍などによる攻撃など様々な能力を使うことができる。悪魔やシャドウといった異形の存在に対抗できるが、これを使えるものは「ペルソナ使い」と呼ばれ限られている。ペルソナは約100-180種類あり、それぞれに神話や伝承にちなんだ名前がついている。タロットカードのアルカナによって大きく22種類（+α）に分類され、同じアルカナのペルソナはある程度似た性質を持つ。そしてペルソナ使いは己自身のアルカナを持ち、その種類によっては相性の違いで能力が変わる。^{ステータス}

「これらは『イゴール』からの受け売りですけど」
解説、乙であります麻希さん。

「慣れると簡単に出来るわ、こんな感じに」

麻希さんの身体が青白く輝くと背後に一人の女性が現れた。インドの民族衣装をて優雅に振舞う姿で慈愛に満ちた表情の美女だよ。

「これが私のペルソナ：『女教皇』女神『パールヴァティ』：」

「すっ！ 凄すぎ、まさにス〇〇〇〇そのものだ」

ペルソナは彼女の戻った。

あなたは〇〇〇ド使いですね、よくわかります。んで、俺もやって見るさ、ペルソナ。

「あれっ？ 出て来ないや」

「最初の発動させるには『絶体絶命の危機』にならなければ難しいかも知れないですね。仲間達は悪魔に襲われた時に覚醒したから」
そんな物かも知れない。麻希さんがペルソナ使いに覚醒したのは珠^{すまゐ}？瑠市の隣町にある御影町で起きた『セベク・スキャンダル』が

引き金になったとの事だ。

表向きは急成長した佐伯エレクトロニクス&バイオロジカル&エネルギーコーポレーション（セベク）の支社長、神取鷹久が行なった極秘実験の事故が原因になっているが実際は違うらしい。

麻希さんは一瞬、とても辛そうな表情をした。

驚いたのは警察や自衛隊は当てにならず、事件当時、高校生だったペルソナ使いに覚醒した仲間達だけで事件を解決したのが凄いで、現在は一人前のカウンセラーとして東京で仕事をしている。

「黎子さんの紹介もあって東京で仕事をさせて貰ってます。友人達とは忙しくてメールでの連絡しか無いけど年に一回は会いますよ」

「東京に来てから他のペルソナ使いに会った事はあるんですか？」

「二人の友人以外では沢村さんが初めてです。東京は広いのでいづれか会う機会があると思います」

「なるほど」

「最後に私から助言できるのは、全てを認めて決して諦めない事です」

抽象すぎてピンと来ないが大事な意味があるのかもしれない。

「ペルソナを覚醒させる手段で「そんなの簡単よ！」って？へ？」「えっ？」

沙羅さんが腕を組んで立っていた。顔がニヤついていますよ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0895i/>

A・K・I・R・A～俺から私へ

2010年10月10日19時38分発行